

弘法大師はなぜ『華嚴經開題』を著作されなかったのか

加藤 精一

(一) はじめに

弘法大師には約三十部にのぼる開題類の著作が残されている。この中には『大日經開題』七部、『金剛頂經』、『理趣經』などの開題類が六部などの両部大經に属するものの開題のほか、『仁王經開題』や『法華經開題』など主な顯教の經典の開題も含まれている。ところが『華嚴經開題』は一部も伝えられていない。『華嚴經』は『法華經』と並んで大乘經典の白眉といわれ、特にこの經典を所依にして成立している華嚴宗は、大師の十住心思想では第九住心に位置され、顯教の最高位に置かれているのである。この經にどうして大師は開題を書かれなかったのか。考えられる理由を研究したい。

(二) 『華嚴經』自体からの理由

弘法大師が、『大日經』や『金剛頂經』などの密教經典以外のいわゆる顯教の經典で開題を著作しているの

は、『仁王経』、『法華経』（五部）、『梵網経』、『最勝王経』（二部）、『金剛般若波羅蜜経』、『一切経』等であるが、このうち『仁王経』、『法華経』、『金光明最勝王経』はいわゆる護国思想の根拠といわれ奈良時代からわが国では重要視されている經典である。また『梵網経』は一般に大乘戒を説く戒經であるということと尊重され、特に伝經大師が大乘戒壇の独立運動を展開していく根拠となっているものであるが、弘法大師が伝經大師の立場とは別に、この經の密教的意義を明らかにしていることから、天台宗と真言密教との相異を示すよい材料になっている。そしてここに大師が『梵網経開題』を著作した理由があると思われる。

また、『金剛般若経』は大乘仏教の根本思想である般若の空思想の經典であり、大般若経の転読会が諸寺で行なわれている。（拾遺雜集、般若読経呪願）ところが、密教眼をもつてこれを見れば真言密教を説く經典と見ることができるとを示したもので、經題を人・法・喻にあてて詳しい解釈をおこない、次に五部、四種法身、四種曼荼羅、求上門、三宝、三大、六合釈、三点、理智、止観、四徳、教理行果、六相、四悉壇などに約して深秘釈をほどこしている。大師はこの經を大乘思想を代表するものととらえて、これに思い切った密教的解釈を加え、般若思想の根本に、深秘の目で見れば密教の思想が縦横に説かれていることを示したのである。次に『一切経開題』も、一切経と仏心と衆生心の関係、仏心と妄心の関係、縁起と中道、唯心と空性、仏身観、法身説法など、仏教思想の基本的な問題が論じられており、この著作を通して自身の仏教理解を明らかにしている。

ところで『華嚴経』は、世間では漠然たる高い支持を受けており、仏教学的にも同様の高い評価を受けているけれども、護国思想などの特別な国家的意義を説くわけではなく、『華嚴経開題』を著作する必要性を感じなかったといえるのである。つまり護国經典でも無く、人口に膾炙している經典でもない『華嚴経開題』など必要が無かったのである。むしろ華嚴宗の教義の中で密教に応用し活用すべきものがあることを大師は見

弘法大師はなぜ『華嚴経開題』を著作されなかったのか（加藤）

抜いたのであり、これについては後述するであろう。

ここで付記しておくことは、『般若心経秘鍵』は『心経』の密教的解釈であり、世に広く読誦され書写されている『心経』について特に論及したのであって、これも広い意味では他の開題類と同様の趣旨で書かれたものといえる。そして『秘鍵』が承和元年、つまり大師ご入定の前年に著作されたとする説が正しいとすれば、弘法大師の十住心思想は、『心経』一巻の二七〇文字に摂し尽くされる、といえるのであり、これこそ大師の求め続けられた諸教の本源だとみなすこともできるのである。

(三) 華嚴宗をどう超えるか

弘法大師の最大の関心事は、華嚴宗をいかにすれば超えることができるか、であった。大師の構築された十住心思想では、華嚴宗の悟りの心を第九住心（極無自性心）に設定し顕教の最高位に置くものの、この法界縁起の考え方は至極のものではなく、仏陀の警を蒙^{いましめ}って忽ちに進み、究極の秘密莊嚴心に至るのである。この場合に、華嚴宗あるいは『華嚴経』をどうすれば超えることができるかというのである。

⁽¹⁾ ちなみに仏典において『華嚴経』を超える価値を示唆している文献はあるのかといえ、筆者は次の二本を挙げることができる。

第一には『釈摩訶衍論』、第二に『大日経疏』である。

まず⁽²⁾ 『釈論』に『起信論』の廻向の頌を釈して、「諸仏というは則ちこれ不二摩訶衍の法なり。所以いかんとならば、この不二の法をかの仏に形^{たぐ}ちふるに、その徳、勝れたるが故に。大本華嚴契経の中にかくの如きの説をなす。その円円海徳の諸仏は勝れたり。その一切の仏は円円海を成就すること能^{あた}わす。劣なるが故に。

もししからば何が故に分流華嚴契經の中にかくの如きの説をなす。慮舎那仏は三種世間をその身心としたもう。三種世間は法を撰あますること余なし、と。かの仏の身心またまたも亦復撰またまたせざる所あることなし、慮舎那仏は三世間を撰すといえども而も撰あま(因海)と不撰あま(果海)との故に。この故に過とがなし。」と。ここには、不二摩訶衍こそ華嚴の慮舎那仏も遠く及ばない(その一部として撰せられてしまうような)価値である、としている。

次に『大日經疏』の『住心品疏』巻第二にいう、「花嚴(3)に衆多の十法門あり、またまさにこれに准じて次第に広く分別して説くべし。しかも此の經宗(真言密教)は、初地より即ち金剛寶藏に入ることを得るが故に、花嚴の十地經の一一の名言は、阿闍梨の所伝によらば皆すべからく二種の積をなすべし。一には浅略積、二には深秘積なり。もし是の如くの密号に達せずして但し文に依つてこれを説かば、則ち因縁の事相は(華嚴經の)十地品に往き渉る。もし金剛頂の十六大菩薩生を解せばおのずから当まごに証知すべし、云々」と。ここは十地を積する部分であるが、明らかに、華嚴のめざす境地は、常途の浅略積で理解してはならないこと、もしそういう解釈で終わったのでは華嚴にとどまってしまって、密教の理解には達することができないこと、そして最終的には密教の十六大菩薩生を理解し体得しなければならぬことを明示しているのであって、華嚴を超えた密教の価値を明かしていると思う。

『華嚴經』は『法華經』と並んで、大乘仏教では常に高い評価を得ており、この『華嚴經』を超える価値のあることを名言している文献は逆にきわめて少ないのである。したがって弘法大師としては、『華嚴經』の開題を著作して華嚴の密教的理解を主張するよりも、むしろ、華嚴をどう超えるかの論証を揃えることに全力を尽したのではあるまいか。大師があえて『華嚴經開題』を著作しなかった第二の理由がここにある、と思う。

弘法大師はなぜ『華嚴經開題』を著作されなかったのか（加藤）

(四) 澄観師による華嚴の密教化

次に考えられる理由は澄観師の『華嚴經疏』に見られる華嚴の密教化である。弘法大師が入唐した西暦八〇四年（延暦二十三年）頃の長安で、華嚴宗の代表であつたのが澄観師である。このお二人が出遇つたことは弘法大師の記録にはないけれども、大師は澄観師から種々の教えを受けた筈であり、御帰国に際しては澄観師作の『華嚴經疏』を請来している。その詳細は別稿にゆずるが、『華嚴經疏』巻第五十九には、『大日經』と『金剛頂經』が引用されており、とくに「阿目佉三蔵あもくきや（不空三蔵のこと）」の名前も登場する。さらにこの作品には『大日經疏』の用語、たとえば即事而真とか如来神力とか速疾神通行、神力加持などがしばしば見られ、また曼荼羅を意識したような説明も処々に見られるなど、密教色が極めて顕著なのである。これらの傾向は澄観師の師である賢首大師法蔵には決して見られないのであり、澄観師の華嚴教学の特色の一つである。さらにまた、十住心の並べかたと同様に、法相宗の次が三論宗という配置が澄観師の十宗判に見られることも、弘法大師との関係で考えることも可能である。

こうした澄観師の密教化の傾向を、弘法大師は強い興味をもつて観察しておられたと思う。果して華嚴宗はどこまで密教を採り込んでいくつもりなのか、日本における華嚴宗はいまだその気配は見えないが、いずれ澄観師の考え方は、日本の華嚴宗に強い影響を与えずにはおかぬであろう。弘仁初年東大寺某阿闍梨宛の書籍に（高野雜筆集下）「空海、大唐より請来せるところの新訳の華嚴經及び疏、儀軌等ねんごろに奉呈せんとする」とある。自分から『華嚴經開題』を書く前に、華嚴宗の内部から密教化の動きがでてくれば、それはそれで興味深ことではないか。いまはとりあえず、現状の華嚴宗の中で密教に生かせる教理があれば

それを使えばよいであろう。大師が『華嚴經開題』を書かれなかった理由の一つがここにもあったのではなからうか。

(五)『即身義』と華嚴教学

最後に、即身成仏思想の証明に弘法大師は華嚴宗の法界無尽縁起の理論を応用しておられることを挙げよう。⁽⁵⁾これも詳細は別稿にゆずるが、これによって弘法大師が華嚴教学を極めて真言密教と近いものだと考えておられたことが分るのである。言うまでもなく華嚴宗はあくまで顕教であるには違いない。これを混同することは間違ってもあり得ない。ただし法界縁起の説明などは、即身成仏と極めて近い見方を持っているので、これを凡即是仏の証明に限って応用しているのである。こうすることによって、逆に、華嚴宗では即身成仏は主張していない、という証明もできるのではないか。ここに弘法大師の明哲さが見られるのである。

弘法大師の主著の一つである『即身成仏義』は、真言密教の仏陀観と人間観の根底に、凡即是仏、凡聖不二の見方のあることを示し、それと同時に法身大日如来は限り無く高い人格を有し、三世常住で、色身あり説法ある生命体であることを証明している著作である。

法身大日は、他の一切の諸仏の根源であって、法界に遍満し、虚空の如き仏身である。しかし虚空に等しいといっても、虚空のように頼りないものではなくて、六大四曼の体相を有し、三密の活動を示しておられる實在の仏身なのであり、こうした仏身が實在されることによつてはじめて私たち凡夫までもが法身大日にいだかれ、一体となることの主張ができるのである。

さて、凡即是仏というのは、凡夫と法身大日という本来ならば遠くかけはなれた二つの存在が、実は同じ

弘法大師はなぜ『華嚴經開題』を著作されなかったのか（加藤）

である、ということである。こうした論証のために弘法大師は、密教独特の加持とか瑜伽とかの用語に加えて、華嚴宗に説かれる法界無尽縁起の論法をも活用しているのである。その例を示せば、

まず二頌八句の第一頌の結句に「重々帝網なるを即身と名づく」とあるが、これは華嚴の十玄門の中の「因陀羅珠網境界門」から出た句である。つまり法界のすべては重々無尽に縁起する、と見る華嚴の立場からすれば一即一切、一切即一であり、これをそのまま即身成仏に応用して、凡即是仏という真言密教を説明している。

さらに『即身義』では、我身・仏身・衆生身の三身は平等である、として「かの身すなわちこれこの身、此の身すなわち是れ彼の身、仏身即ち是れ衆生の身、衆生の身即ち是れ仏身なり」といい、これを『大日經』の三等無礙の真言でまとめているのだが、この考え方は、『華嚴經』にも、「心の如く仏もまた爾なり。仏の如く衆生もまた爾なり。心・仏及び衆生、この三つ差別無し」とある。これで知れるように、真言密教で説く三平等の思想は『大日經』に見えると同様に、『華嚴經』にも見えるのである。ただし、華嚴宗の教学ではこれを真言密教のように前面に押し出しているわけでもないし、即身成仏というような主張はしていないのであって、『五教章』に説かれる修行論を見ると、一般大乘仏教と同じく、修行者は、菩薩の五十二位を順に経ていくことになっている。

最後に六大体大説についても華嚴との関係を指摘しておきたいと思う。これは法界というものをどうとらえるかの問題である。弘法大師が体相用の三つの方面から即身成仏を論証しているのは『起信論』の三大からのヒントによるのであろうし、法界体性などという用語は『仏地經』等を経て、不空三蔵の手によって法界体性智となったと推測されるが、これらインド思想からの影響に加えて、弘法大師の場合、中国で展開された華嚴の法界縁起の思想とも決して無縁ではないと考えられる。

華嚴教学ではすでに述べたように重々無尽縁起であり、円融無礙、一多相即相入し、一即一切・一切即一なること因陀羅網の重々無際なるが如しと説き、こうした法界の姿を明らかに観察し体解することが中心的課題なのである。一方、弘法大師はこうした華嚴の究極としての法界を、法界体性と展開し、六大をもって法界の体性とし、これすなわち法身大日如来の三摩耶身である、と断定している。『即身義』の中で大師は、⁽⁸⁾「故に仏、六大を説いて法界体性となしたもう。(中略)密教にはすなわちこれを説いて如来の三摩耶身となる。(中略)かくの如きの六大法界体性所成の身は、無障無礙にして互相に涉入相応し、常住不変にして同じく実際に住せり」というのがこれである。このように弘法大師の思想の基礎には法界の思想があるのだが、それはインドの仏教思想の中で生き続け、不空によって密教に導入されたものだけではなく、中国で発達した華嚴の法界觀の系譜をも承けていると考えなければならないのである。

弘法大師が入唐以前にすでに華嚴を学んでいたことは当然としても、入唐中に遭遇したであろう澄観師から面授して得た華嚴教学の影響があり、しかもその澄観師の華嚴教学理解の一端にすでに密教との融合の方向が見出せるわけで、これらのことは弘法大師にとって重大なことであつたと思われる。

このように、華嚴教学の理論をそのまま、部分的にせよ、即身成仏思想の証明に応用している以上、さらに『華嚴經開題』を著作する必要は認められなかった、ということも理由の一つに挙げられると思う。

(六) まとめ

以上五つの理由をまとめると次のようである。第一に『華嚴經』自体の性格による、すなわち仏教学的には高い評価を受けるものの、他の護国經典のような国家的な意味を持っていないということ。第二に弘法大

弘法大師はなぜ『華嚴經開題』を著作されなかったのか（加藤）

師の最大の関心事が、華嚴をいかにしたら越えられるか、であって、『開題』を書くお気持ちなど無かったということ。第三に、入唐時の中国の華嚴宗の代表であった澄観師から親しく教えを受け、著作である『華嚴經疏』を読んだ大師が、その中に、華嚴の密教化を感じたこと、いずれわが国の華嚴宗にも影響があるであろうことを予測して、その動向を見極めようとしたこと。そして最後に、華嚴の法界縁起や法界観の骨子を、真言密教の即身成仏の証明に応用していること、したがって、これ以上『開題』を書く意味を感じなかったこと、などである。

註

- (1) 拙著『弘法大師思想論』二四二頁以下
 - (2) 大正蔵32、六六八上
 - (3) 大正蔵39、六〇五上
 - (4) 拙著『弘法大師思想論』二五三頁以下
 - (5) 拙著前掲二二三頁以下
 - (6) 弘法大師全集①五一六頁
 - (7) 大正蔵9、四六五下
 - (8) 弘法大師全集①五一二頁
- 【キーワード】即身成仏義、法界縁起、澄観、弘法大師空海